

## 第4章 2000年代のロシア農業

### —生産回復と穀物輸出—

野部 公一

#### 1. はじめに

1990年代のロシア農業は、経済体制の転換にともない、ロシア史上最悪の生産低落を経験した。1992年以降のロシアの農業生産高は、気象条件に恵まれた1997年を唯一の例外として、1998年まで低落を継続した。ロシア農業は、1999年以降、ようやく回復を開始する。その際を中心となったのは耕種生産であり、とりわけ穀物生産であった。ロシアは2000年代前半には穀物の純輸出国となり、2000年代後半には「新興小麦輸出国」として世界市場に復帰した。本稿は、こうした大きな変化のあった2000年代を長期的な視点でふりかえり、そのことによってロシア農業の今後を考察しようとする試みである。

本稿の構成は、以下のとおりである。2.では、おもに統計資料に依拠しつつ、2000年代の農業生産の回復を明らかにする。つぎに3.では、こうした農業生産の回復にもっとも貢献したと考えられる農業政策の転換を考察する。そして、4.では、穀物輸出をめぐる問題を検討する。最後に5.では、以上の考察を踏まえて、ロシア農業の今後をごく簡単に考察する。

#### 2. 農業生産の回復

計画経済から市場経済への移行にともなう、ロシア農業の生産減少は極めて激しいものであった。農業生産高は、1991年を100とする指数で1998年には58を下回るまで低落した。その後、ロシアの農業生産は、回復基調で推移する。生産回復は1999年から2002年まで継続し、2003年の若干の後退をへて、2004年から2009年まで増大を続けた。ただし、2010年には、史上最悪とも言われる旱魃のため、再び大幅な減少を記録した。

こうした近年の農業生産回復のきっかけとなったのが、耕種生産の回復であった。耕種生産は、1999年以降、比較的速いテンポでの生産を増加させた。そして、2008年および2009年には、1991年の生産水準を上回るにいたったのである(第1表)。

耕種生産の中でも劇的な伸びを示したのが、穀物である。穀物生産は、1998年にわずか4790万トンにとどまり、1951年以来の最低を記録した。しかし、1999年以降には、穀物生産は回復基調へと変わった。穀物生産量は、2001年～2002年に8,000万トンを超え、2004年～2007年も8,000万トン前後の比較的安定した水準を確保した。さらに、2008年には、穀物生産は、久々に1億トン台を回復し、経済体制移行後での最高を記録した。2009年お

よび 2010 年には、2 年続きで早魃に見舞われた。しかし、このような悪条件にもかかわらず、2009 年には 1 億トン台に迫る 9,710 万トンが、2010 年においてすら 6,000 万トン台の生産が確保された(第 2 表)。

第 1 表 ロシアの農業生産の推移 (1992~2010 年)

年	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001
対前年比%										
農業生産	-9.4	-4.4	-12.0	-8.0	-5.1	0.9	-14.1	3.8	6.2	6.9
うち耕種	-5.4	-2.9	-10.4	-4.6	0.3	6.2	-24.3	8.9	10.9	9.8
うち畜産	-11.9	-5.4	-13.1	-10.4	-11.0	-5.0	-1.8	-0.8	1.1	3.6
生産指数(1992=100)										
農業生産	90.6	86.6	76.2	70.1	66.5	67.1	57.7	59.9	63.6	68.0
うち耕種	94.6	91.9	82.3	78.5	78.8	83.6	63.3	68.9	76.5	84.0
うち畜産	88.1	83.3	72.4	64.9	57.8	54.9	53.9	53.4	54.0	56.0

  

年	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010
対前年比%									
農業生産	0.9	-0.1	2.4	1.6	3.0	3.3	10.8	1.4	-11.9
うち耕種	-1.3	0.4	6.3	2.7	0.3	2.3	18.0	-1.4	-25.4
うち畜産	3.2	-0.6	-1.7	0.4	5.6	4.3	3.0	4.6	2.6
生産指数(1992=100)									
農業生産	68.6	68.5	70.2	71.3	73.4	75.8	84.0	85.2	75.1
うち耕種	82.9	83.2	88.4	90.8	91.1	93.2	110.0	108.4	80.9
うち畜産	57.8	57.4	56.4	56.7	59.8	62.4	64.3	67.3	69.0

資料: Индексы производства продукции сельского хозяйства по категориям хозяйств по Российской Федерации,  
<http://www.gks.ru/wps/wcm/connect/rosstat/rosstatsite/main/enterprise/economy/#>  
 ,25.06.2011.

さて、耕種生産の回復は、基本的には単位面積当り収穫量の増大によって、すなわち、集約化によって達成されている。第 3 表は主要耕種生産物のヘクタールあたりの収穫量を、第 4 表は主要耕種生産物の播種面積の推移を示したものである。この二つの表からは、上述の傾向が確認できる。

唯一の例外となっているのが、ひまわり種子である。ひまわり種子は、収益性が高いこともあって、農民経営を中心として早くから増産が開始された。現在の生産量は、ソヴィエト末期のほぼ二倍で推移している。ただし、増産の要因は、播種面積の拡大であって、ヘクタール当り収穫量はソヴィエト末期の水準を回復できない状態である。

なお、穀物のなかでも、とりわけ小麦生産が拡大している。これは、播種面積に占める小麦の比率の拡大にあらわれている。また、同時に注目すべき動向としては、秋播き面積の増加があげられる。ロシアの小麦生産においては、気象条件もあって、常に春播き面積が秋播き面積を圧倒していた。ところが近年では、秋播き面積が拡大し、春播きのそれに拮抗しつつある。単位面積当り収穫量では、秋播き小麦が、春播き小麦を大きく上回っているから、近年では秋播き小麦の収穫量の方が春播き小麦のそれを上回っている計算に

なる。

第2表 主要耕種生産物の推移

単位:百万トン

	1986-90年						
	平均	1998年	1999年	2000年	2001年	2002年	2003年
穀物	104.3	47.9	54.7	65.4	85.1	86.5	67.0
てんさい	33.2	10.8	15.2	14.1	14.6	15.7	19.4
ひまわり種子	3.1	3.0	4.1	3.9	2.7	3.7	4.9
じゃがいも	35.9	31.4	31.3	29.5	29.5	26.9	29.3
野菜	11.2	10.5	12.3	10.8	11.2	10.7	11.7

  

	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年
穀物	77.8	77.8	78.2	81.5	108.2	97.1	61.0
てんさい	21.8	21.3	30.7	28.8	29.0	24.9	22.3
ひまわり種子	4.8	6.5	6.7	5.7	7.4	6.5	5.3
じゃがいも	27.9	28.1	28.3	27.2	28.8	31.1	21.1
野菜	11.2	11.3	11.3	11.5	13.0	13.4	12.1

資料: Российский статистический ежегодник. 2010, Росстат, М., 2011, С. 428, Российский статистический ежегодник. 2002, Госкомстат РФ, М., 2003, С. 413, Основные показатели сельского хозяйства в России в 2010 году, Росстат, М., 2011, С. 11, Сельское хозяйство, охота и лесоводство в России, Росстат, М., 2009, С. 72.

第3表 主要耕種生産物のヘクタールあたり収穫量

単位:トン

	1986-90	1991-95	1996-2000	2001	2002	2003	2004
穀物	1.65	1.57	1.51	1.94	1.96	1.78	1.88
てんさい	23.0	17.9	17.7	19.9	21.9	22.7	27.7
ひまわり種子	1.33	1.08	0.85	0.78	0.97	1.00	1.02
じゃがいも	11.0	11.0	10.5	10.9	10.3	11.6	11.5
野菜	16.3	14.5	14.4	15.5	15.2	16.8	16.7

  

	2005	2006	2007	2008	2009	2010
穀物	1.85	1.89	1.98	2.38	2.27	1.83
てんさい	28.2	32.5	29.2	36.3	32.3	24.1
ひまわり種子	1.19	1.14	1.13	1.23	1.15	0.96
じゃがいも	12.1	13.3	13.2	13.8	14.3	10.0
野菜	17.5	17.3	17.9	19.6	19.9	18.0

資料: Российский статистический ежегодник. 2010, С.433, Основные показатели сельского хозяйства в России в 2010 году, С.14.

こうした秋播き拡大の消極的な要因としては、2009年以降の早魃の条件下で春播きがうまく進行しなかったことが考えられる。また、積極的な要因としては、より収穫の高い秋播き小麦の栽培を優先する経営が増加したことが考えられる。これは、生産の合理化を目

指す動きとも考えられるが、今後の生産動向に注意する必要がある。というのは、秋播き小麦は、高い収穫を得られるが、その分、地力消耗的であり、対応する施肥および農業技術が必要とされるからである。こうした処置が適切になされない場合には、生産量に悪影響が現れる危険性が存在する。

第4表 播種面積構造の推移

年	1980	1990	1995	2000	2005	2007	2008	2009	2010
総播種	124815	117705	102540	84670	75837	74759	76923	77805	75188
穀物	75465	63068	54705	45585	43593	44265	46742	47553	43194
(%)	60.5	53.6	53.3	53.9	57.4	59.2	60.8	61.2	57.5
うち小麦	34000	24244	23909	23205	25342	24382	26633	28698	26614
(%)	27.2	20.6	23.3	27.4	33.4	32.6	34.6	36.9	35.4
うち秋播き	11107	9731	8194	7933	10363	10597	12692	13835	12699
うち春播き	22893	14513	15715	15272	14979	13785	13941	14863	13915
てんさい	1615	1460	1085	805	799	1060	819	819	1160
(%)	1.3	1.2	1.1	1.0	1.1	1.4	1.1	1.1	1.5
ひまわり種子	2380	2739	4127	4643	5568	5326	6199	6196	7153
(%)	1.9	2.3	4.0	5.5	7.3	7.1	8.1	8.0	9.5
じゃがいも	3790	3124	3409	2834	2277	2069	2104	2193	2212
(%)	3.0	2.7	3.3	3.3	3.0	2.8	2.7	2.8	2.9
野菜(露地物)	742	618	758	744	641	624	641	653	662
(%)	0.6	0.5	0.7	0.9	0.8	0.8	0.8	0.8	0.9
飼料作物	38421	44560	37056	28899	21610	19532	18560	18288	18071
(%)	30.8	37.9	36.1	34.1	28.5	26.1	24.1	23.5	24.0
純休閑地	9506	13808	17383	18042	14895	13612	13732	13972	13972

資料: Российский статистический ежегодник. 2010, С.431, Основные показатели сельского хозяйства в России в 2010 году, С.7.

一方、畜産部門は、依然として生産回復の度合では耕種部門に対して遅れている。家畜・家禽飼養頭数および主要畜産物生産においては、回復傾向が顕著になってきているものの、かつての水準を大きく下回った状態が継続している。

第5表は、家畜・家禽の飼養頭羽数の推移を示したものである。同表からは、豚、家禽、山羊・羊の飼養頭羽数は、2000年以降では回復基調で推移していることがわかる。これに対して、牛飼育頭数は、雌牛のそれを含めて依然として減少が続いている。

第6表は、主要畜産物生産の推移を示したものである。同表からは、生産量は、依然としてソヴィエト期の水準を大きく下回っていることが確認できる。ただし、近年では、国家支持を背景として、養鶏・養豚部門での生産回復が著しい。例えば、食肉生産では2006～2010年の5年間で、鶏肉は75%、豚肉は40%もの増産を達成している<sup>1</sup>。また、牛乳生産においては、雌牛頭数は減少を続けているが、雌牛一頭当たりの搾乳量は継続的に上昇している。それは、2009年には年間3,737キロに達し、ソヴィエト期の1990年の年間2,731キロを大きく凌駕している<sup>2</sup>。また、国際的に見ても、BRICsをはじめとする新興国のなかでは、良好なものとなっている(第7表)。

第5表 主要家畜・家禽飼養頭数の推移

単位:百万頭羽

	1990年	1995年	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年
牛	57.0	39.7	27.5	27.4	26.8	25.1	23.2
うち雌牛	20.5	17.4	12.7	12.3	11.9	11.1	10.2
豚	38.3	22.6	15.8	16.2	17.6	16.3	13.7
羊・山羊	58.2	28.0	15.0	15.6	16.4	17.3	18.1
家禽	660	423	341	347	346	343	342

  

	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年
牛	21.6	21.6	21.5	21.0	20.7	20.0
うち雌牛	9.5	9.4	9.3	9.1	9.0	8.8
豚	13.8	16.2	16.3	16.2	17.2	17.2
羊・山羊	18.6	20.2	21.5	21.8	22.0	21.8
家禽	357	375	389	405	436	449

資料: Российский статистический ежегодник. 2010, С.441-442, Основные показатели сельского хозяйства в России в 2010 году, С.15.

第6表 主要家畜物生産の推移

	1986-90年	1991-95年	1999年	2000年	2001年	2002年	2003年
食肉・屠体重(千トン)	9671	7550	4313	4432	4451	4694	4993
うち牛	4096	3391	1868	1895	1872	1957	2002
うち豚	3347	2475	1485	1569	1498	1583	1743
うち羊・山羊	369	323	144	140	133	136	134
うち鶏	1747	1277	748	766	884	953	1048
牛乳(百万トン)	54.2	45.4	32.3	32.3	32.9	33.5	33.3
鶏卵(10億個)	47.9	40.3	33.1	34.1	35.2	36.3	36.6
羊毛(千トン)	225	151	40	40	40	43	45

  

	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年
食肉・屠体重(千トン)	5046	4990	5278	5790	6268	6719	7068*
うち牛	1954	1809	1722	1699	1769	1741	N. A.
うち豚	1686	1569	1699	1930	2042	2169	N. A.
うち羊・山羊	145	154	156	168	174	183	N. A.
うち鶏	1192	1388	1632	1925	2217	2555	N. A.
牛乳(百万トン)	31.9	31.1	31.3	32.0	32.4	32.6	31.9
鶏卵(10億個)	35.9	37.1	38.2	38.2	38.1	39.4	40.6
羊毛(千トン)	47	49	56	54	57	54	N. A.

資料: Российский статистический ежегодник. 2010, С.442, Основные показатели сельского хозяйства в России в 2010 году, С.16. Сельское хозяйство, охота и лесоводство в России, Росстат, М.,2004, С.81. Сельское хозяйство, охота и лесоводство в России, 2009, С.90.

注.\*2010年の食肉生産量は、前年生産量に生体重による増加率(5.2%)を掛け合わせたもの。

以上の結果、畜産部門は、2005年から継続的に成長している。とりわけ、2009年および2010年においては、旱魃によって落ち込んだ耕種部門を畜産部門が補うというパターンが続いている。このように、耕種部門から開始された農業生産の回復は畜産にも波及し、近

年では、畜産が農業生産全体の回復を下支えするという構図が成立している。

第7表 雌牛一頭あたりの搾乳量の比較

	単位:キロ		
	2000年	2005年	2007年
ロシア	2502	3176	3504
ブラジル	1140	1170	1224
インド	1003	1087	1109
中国	1749	2500	3109
ルーマニア	2542	3146	3260
フランス	5948	6288	6240
オーストラリア	5151	4861	5133
アメリカ	8254	8877	9219
日本	6792	7236	7454

資料: Сельское хозяйство, охота и лесоводство в России, 2009, С.202.

### 3. 農業政策の転換

農業生産回復の最大の原因は、1990年代にとられた「超自由主義的」な農業政策の転換にあった。経済体制移行直後の農業政策は、ソフホーズ・コルホーズの農業企業への再編成、農民経営の創出といった構造改革にその重点がおかれていた。また、農業政策の根幹には、自由化と競争による弱者の淘汰という発想が存在しており、農業生産者への支持・支援は、ほとんど考慮されていなかった。

ところが、1998年の通貨・金融危機の発生、その直後のルーブリの大幅な切り下げにより農産物輸入は激減し、国産農産物への代替が進展することになった。通貨・金融危機は、ロシア農業に対して予期せぬ形で保護を与え、その回復を大いに助けることになったのである。結果として、農業への保護・支持の有効性が再認識され、従来の構造政策に偏重した農業政策は転換されることになった。

2000年2月のガルデーエフ農相の演説は、以上の経緯を次のように表現した。「指摘しなくてはならないのは、農業改革期において、われわれは、まさにわれわれの農業経済自由化の規模において、もっとも市場的な諸国すらも追い抜いていたということである。」彼は、かつての農業政策をこのように批判的に総括し、アメリカ、EUさらには中国の事例をあげ、農業部門での国家支持および国家規制の必要性、適切な貿易政策による国内生産者の保護の必要性とその高い効果等を繰り返し強調した<sup>3</sup>。

このような農業政策の転換と呼応して、国内農業生産者の支持・保護を目的とする政策が採択された。例えば、2000年の収穫期には、農業向け短期融資に対する利子補助金制度が導入された。翌2001年には、牛肉・豚肉・鶏肉に対する輸入クォーターが導入された。

2005年9月には、農業の発展が、医療・教育・住宅供給とともに、国家の社会・経済政策の優先分野の一つに選定された。この選定に基づき、2006～2007年には、優先的国家プロジェクト「農工コンプレックスの発展」が実施された<sup>4</sup>。同プロジェクトでは、「畜産発展の加速化」「小規模経営形態の発展促進」「農村の若い専門家(およびその家族)への住宅供給」が目標として掲げられた。このうち、「畜産発展の加速化」の下では、畜舎などの畜産施設の近代化・新設のための信用供与の拡大と利子補助金の導入、生産性向上のための種畜の購入とリース等が実施された<sup>5</sup>。これらの方策は、近年の食肉生産の回復としてその成果が現れている。

2006年12月29日には、連邦法「農業の発展について」が発効した。同法は、ロシアにおける農業政策の基本的目的、原則、方向を規定したものであり、日本の「食料・農業・農村基本法」に相当するものである。その第8条には、中期(5年間)の「農業発展、農産物・原料・食料市場の規制」を図るための国家プログラム作成が定められている。この条項に基づき、かつ優先的国家プロジェクトを継承する形で、2008～2012年を対象とする国家プログラムが作成・実施されている。同プログラムは、農業生産を2012年には2007年比で21.7%増加させることを目標としている。このうち、優先分野とされているのが畜産であり同期間の生産増を27.7%としている。

なお、連邦法「農業の発展について」は、国家プログラムについて、その「最後の年の3月1日までに、次の5カ年の国家プログラムの草案」を政府に提出するように規定している。つまり、2012年3月1日までに「2013～2017年の国家プログラム」の草案が提出されることになる。

また、2010年初頭には、国家安全保障戦略の一環として「食料安全保障ドクトリン」が承認された。同ドクトリンにおいては、「食料安全保障」という概念は、農産物の国内自給としてではなく「住民に対して、安全な農産物、魚およびその他の水産物、食料を確保すること」として解釈された。国内生産は、安全な食品の住民への保障のための手段の一つとして理解されることになった。とはいえ、「ロシア連邦の食料的独立」の確保のため、主要農産物の自給目標が設定された。それは食肉で85%、牛乳および乳製品で90%、てんさいで80%、穀物で95%、じゃがいもで95%と極めて高いものとなっている。現状では、穀物とじゃがいもを除けば目標は達成されておらず、対応した増産のための方策がとられている。その内容は、土壌肥沃度の向上と単位面積収穫量の引き上げ、未利用耕地を利用しての播種面積拡大、土地改良システムの再建と建設、畜産発展の加速化などの多岐に及んでいる<sup>6</sup>。

このように近年のロシアの農業政策は、農業生産者の支持・保護、市場規制を基調としつつ、より整理され、体系化されているのである。

#### 4. 穀物輸出をめぐる問題点

2001年以降、ロシアは、穀物貿易においてネットでの輸出国となった。穀物輸出の中核

を成しているのは小麦であり、メスリン(小麦とライ麦を混合したもの)を加えると、全量の7割程度をコンスタントに占めている(第8表)。

第8表 ロシアの穀物貿易の推移

		単位:千トン				
		2000年	2001年	2002年	2003年	2004年
輸出	穀類	1352	3392	13856	11472	5869
	うち小麦およびメスリン	594	1707	10566	7787	4716
	うち大麦	627	1595	3176	3207	1077
輸入	穀類	4667	1839	1359	1627	2898
	うち小麦およびメスリン	2633	916	265	642	1364
		2005年	2006年	2007年	2008年	2009年
輸出	穀類	12250	11153	16673	13593	21805
	うち小麦およびメスリン	10348	9724	14513	11764	16827
	うち大麦	1769	1287	1908	1537	3491
輸入	穀類	1449	2313	1067	959	432
	うち小麦およびメスリン	577	1397	465	179	95

資料:Российский статистический ежегодник. 2003, С.641-643; 2006, С.731; 2009, С.710, 716; 2010, С.730, 736.

穀物輸出は開始されたが、ロシアの穀物生産は、依然としてソヴィエト期末期の水準を回復できていない。すなわち、現在のロシアは、穀物の恒常的輸入を行っていたソヴィエト期よりも少ない生産量で、穀物輸出を行っているということになる。このような逆説的な状況は、ロシア国内での穀物消費量が大幅に減少したことから説明できる。

第9表は、ソヴィエト期末期からのロシアの穀物バランスの変化を示したものである。同表からは1990年から2000年の間に穀物生産は、1億1,670万トンから6,550万トンへとほぼ45%の大幅な減少を記録したが、同期間の穀物支出も1億2,770万トンから6,400万トンとほぼ半減したことがみてとれる。この結果、穀物生産は大幅に減少したが、国内需要は完全に充足できる状態になったことが確認できる。

2001年以降になると、穀物生産は、前節でも検討したように回復基調で推移するが、国内需要は最大でも7,500万トンを超えることなく6,000万トンの後半から7,000万トンの前半で推移した。こうして、国内で需要を見いだせなかった穀物が、輸出によって処理されるという構造が成立した。このような経緯から、2001年以降には、毎年ほぼ1,000~2,000万トン程度の穀物が輸出されることになった。

穀物の国内需要減少の最大の要因は、飼料用需要の減少であった。同じく1990年から2000年の間をとると、飼料用需要は7,490万トンから3,240万トンと実に56%減少して、半減以下となっている。これはこの間の国内畜産の崩壊と密接に関連している。

ソヴィエト期における畜産は、ほぼ補助金に依存する形で運営されていた。市場経済への移行とともに、補助金は根絶されたため、国内畜産は、直ちに窮地に追い込まれた。これに加えて、海外からは貿易の自由化とともに、安価かつ高品質な畜産物が流入した。国内市場は輸入品によって席卷され、国内畜産は長期間にわたる低迷状態に陥った。家畜・



家禽の飼養頭羽数は激減し、対応して飼料用穀物も激減したのである。

第9表 ロシアにおける穀物バランスの推移

	単位:百万トン					
	1990年	1995年	2000年	2001年	2002年	2003年
生産量	116.7	63.4	65.5	85.2	86.6	67.1
生産的支出	91.9	65.1	43.9	48.7	52.8	48.3
うち飼料	74.9	49.5	32.4	36.5	40.7	37.3
うち種子	17.0	15.6	11.5	12.2	12.1	11.0
食用目的加工	30.9	19.4	17.4	19.0	18.3	18.0
工業的加工	2.5	2.1	1.8	2.0	2.4	2.5
損耗	2.4	1.4	0.9	0.9	0.9	1.0
国内支出計	127.7	88.0	64.0	70.6	74.4	69.8

  

	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年
生産量	78.0	78.1	78.5	81.8	108.2	97.1
生産的支出	47.3	46.9	48.6	46.6	52.0	51.7
うち飼料	36.1	36.1	38.1	36.3	40.7	40.3
うち種子	11.2	10.8	10.5	10.3	11.3	11.4
食用目的加工	17.9	16.9	17.5	17.2	17.9	17.4
工業的加工	2.6	2.4	2.2	2.3	2.1	1.9
損耗	1.0	0.9	1.0	1.0	0.9	1.0
国内支出計	68.8	67.1	69.3	67.1	72.9	72.0

資料: Российский статистический ежегодник. 2010, С.449.

以上の結果、ロシアは、穀物を輸出しつつ畜産物を輸入するという「独特の」農産物貿易パターンをとることになった。輸入される畜産物は、穀物に換算すると年に「1,200～1,500万トン」に相当すると試算されている<sup>7</sup>。これは、ロシアの2005～2008年の年間穀物輸出量にほぼ相当する。すなわち、ロシアは、穀物を輸出し、それを飼料として飼育されるのに等しい畜産物を輸入しているという計算になる。穀物に比べて畜産物は高価であるから、その貿易収支は大幅な赤字となる<sup>8</sup>。現在のロシアは、経済的に不利な形で世界市場に組み込まれているといえる。

このような状況を改善するため、近年、ロシア政府は、国内畜産の振興に力を注いでいる。関税政策をも駆使した総合的な方策により、前述のように養豚・家禽部門を中心として、一定の成果をあげている。だが、飼料用の穀物需要の増加は、未だ著しいものとはなっていない。

現段階のロシアでは、2004～2006年に記録されたような7,800万トン台の穀物生産が確保されるのであれば、国内需要は十分に満たされる。これに対して、2001～2002年のような8,500万トン程度の穀物生産が確保された場合には、1,000万トン前後の輸出が可能となる。そして、2007～2009年で達成された年平均9570万トンの穀物生産が確保された場合には、2,000万トン前後の輸出が可能となる。もし、それに見合う穀物輸出が行えない場合には、国内に余剰穀物が滞留し、穀物価格は暴落してしまうであろう。この意味では、ロシアは過剰穀物の処理のため、穀物輸出を強いられているとも言える。

穀物輸出が恒常化するとともに、ロシアの穀物生産において、新たな問題が認識されつ

つある。

第一に、輸出競争力を高める観点から、小麦の品質向上が課題として提起されている。現在のロシアの小麦輸出の主力として、その80%程度を占めているのは、ロシアの分類で「Ⅳ級」「Ⅴ級」に分類されるものである<sup>9</sup>。これらは、基本的に飼料用であり、品質は高いものではない<sup>10</sup>。

ただし、小麦の品質が低いという問題は、ロシアの小麦生産全体の問題でもある。その原因としては、市場経済への移行にともなって、施肥量が減少したこと、農業機械の更新が行えず適期での農作業の遂行が困難になっていること等があげられる。加えて、ロシア国内での穀物の等級による価格差は極めて小さく、品質向上のための有効な経済的刺激となっていない。第10表は、小麦の等級による収益率の差異を示したものである。同表からは、食用に相当する「Ⅲ級」小麦と、「Ⅳ級」および飼料用小麦との収益率の差は、2001～2005年においてほとんど存在しなかったことが見て取れる。状況は2006～2009年になると変化し、一定の差異があらわれる。しかし、この期間に関しては、今度は「Ⅲ級」と「Ⅰ・Ⅱ級」小麦の収益性が、わずかながら逆転してしまっている。輸出される小麦の品質改善には、上記の問題の解決を必要としており、相応の時間が必要であろう。

第10表 小麦等級による収益性の比較(農業企業のデータによる)

	販売量に占める比率(%)	原価(トンあたりルーブリ)	販売価格(トンあたりルーブリ)	収益(トンあたりルーブリ)	収益率(%)
2001-05年					
小麦平均	100	1584	2062	478	30.2
うちⅠ・Ⅱ級	2.0	1670	2488	818	49.0
うちⅢ級	20.8	1707	2215	508	29.7
うちⅣ級および飼料	77.2	1549	2011	462	29.8
2006-09年					
小麦平均	100	3014	3976	962	31.9
うちⅠ・Ⅱ級	1.9	3178	4352*	1174	36.9
うちⅢ級	18.9	3177	4412	1235	38.9
うちⅣ級および飼料	79.2	2972	3863	891	30.0

資料: Алтухов, Указ. Статъя, С.14.

注\*原表は「7352」.

第二は、穀物保管能力の改善である。公式データによれば、ロシアでは1億1,820万トンの穀物が保存可能であるという。だが、近年の1億トンを超える穀物生産の下では、能力不足がしばしば感じられるようになっている。しかも、穀物エレベーターの保管能力は3,290万トンでしかない。また、その70～80%までが装備が老朽化しているという。さらに、穀物生産とその保管能力との不均衡が発生している。とりわけて、主要な穀物生産地域である中央連邦管区、沿ヴォルガ連邦管区、南部連邦管区における保管能力の不足が発生している。これら主要生産地域では、2009年に約1,760万トン相当の保管能力が不足したという<sup>11</sup>。

第三に、国家による穀物の介入買付の改善である。介入買付に関しては、従来もその価格水準が不十分であること、その時期が遅れ気味であり、効果に乏しいことが批判されてきた<sup>12</sup>。最近では、2010年の事態をうけて、介入買付を拡大する必要性が提起されている。2010年の歴史的な早魃によりロシアの穀物生産は、一挙に6,000万トン台まで減少することになった。前年の繰り越し穀物の存在により、当面の穀物不足は回避できる見通しであった。しかし、ロシア政府は、国内価格の高騰防止を最優先し、2010年8月15日に、年末までの小麦および小麦粉を中心とする穀物輸出を禁止した。2011年1月1日より小麦粉の輸出禁止は解除されたが、穀物の禁輸は2011年7月1日までに延長された<sup>13</sup>。

このような事態の原因として、政府の穀物の介入買付量の不足が指摘されている。現行の買付量は国内販売量の6~8%程度である。この量は、市場に対して十分な影響を与え得えず、アメリカのように年間消費量の40%程度を繰り越し予備として確保すべきではないかとの提起がおこなわれている<sup>14</sup>。この議論の可否は、ともかく、安定的かつ持続的な穀物輸出をおこなうためには、政府の穀物市場への政府の参画の強化が求められているのは間違いない。

## 5. おわりに

2010年の早魃は、「少なくとも千年」は記録されていないとされる稀にみる激烈なものであった<sup>15</sup>。早魃は、ロシアの43の連邦構成主体に被害を及ぼし、1,330万ヘクタールもの農作物を壊滅させた。これは、当該地域の全播種の30%、ロシアの全播種面積の17%にも相当した<sup>16</sup>。

早魃は、穀倉地帯である沿ヴォルガおよび中央連邦管区において猛威をふるい、穀物生産にも悪影響を与えた。こうした早魃にもかかわらず、ロシアは2010年に6,000万トン台の穀物収穫を確保した。これは、経済体制の移行とともに、穀物生産が優良経営および条件の整った地域へと集中したこと、その結果、穀物生産の相当な底上げが達成されたことを物語っている。

ロシアの穀物輸出の開始は、以上のような穀物生産の効率化の成果とも考えられる。しかし、同時に穀物輸出は、余剰穀物発生による強いられた性格をもつ。並行しての畜産物輸入の継続は、ロシアにとって極めて不利な形で、国際分業へ組み込まれてしまったことを示している。この意味で、穀物輸出は、手放しの成功とは言えず、多くの課題を抱えた限定的な成功とでも言うべきものになっている。

今後のロシアは、国内畜産を振興しつつ（穀物の国内需要を増やしつつ）、当面は相当の量の穀物を輸出し続けなくてはならない。この際には、輸出先の確保が常に問題となろう。この点では、2010年の穀物禁輸の実施は、ロシアの穀物輸出国としての未成熟さを国際穀物市場に露呈してしまった。そこで示された「輸出先の事情を考慮せず自国の都合を最優先する」対応は、輸出先の確保にたいする相当な阻害要因となると思われる。

- 
- <sup>1</sup> Скрынник Е.Б. Заложена прочная основа развития сельского хозяйства//Экономика сельского хозяйства России.2011.№4, С.25.
- <sup>2</sup> Российский статистический ежегодник. 2010, С.448.なお,農業企業のみでは,2009年に4089キロ,2010年に4592キロが記録されている(Основные показатели сельского хозяйства в России в 2010 году, С.18).
- <sup>3</sup> Гордеев, А.В. О состоянии и неотложных мерах по стабилизации и развитию агропромышленного комплекса, Тезисы доклада на Всероссийском совещании работников АПК, 10-11 февраля 2000 г.
- <sup>4</sup> Милосердов В.В. Приоритетный национальный проект «Развитие АПК»: Проблемы и пути их решения//Экономика сельскохозяйственных и перерабатывающих предприятий. 2006. №2. С.8.
- <sup>5</sup> «Экономика-политическая ситуация в России», январь 2006, С.35.
- <sup>6</sup> Скрынник Е.Б. Выступление на заседании Совета Безопасности Российской Федерации по вопросу «об обеспечении продовольственной безопасности Российской Федерации», Министерство Сельского Хозяйства Российской Федерации, [http://www.mcx.ru/news/news/show\\_print/3698.195.htm](http://www.mcx.ru/news/news/show_print/3698.195.htm), 21.06.2011, Российская экономика в 2010 году, Институт экономической политики им. Гайдара, М., 2011, С.285-286.
- <sup>7</sup> Белозерцев А. Г. Земля и хлеб России (1900-2005гг.) Историко-экономический очерк, М.,2005, С.350.
- <sup>8</sup> 例えば,2004年の農産物・食料品貿易は約105億ドルの赤字であった.赤字額は,その後も増加し,2008年には約260億ドル,2009年にも約201億ドルを記録した(Российский статистический ежегодник. 2009, С.706-707; 2010, С.726-727).
- <sup>9</sup> Алтухов А.И. Новые проблемы развития зерновой отрасли//АПК: Экономика, управление. 2011.№1.С.13.
- <sup>10</sup> «Крестьянские ведомости», 2008 №.44, стр.7.ロシアの基準によると,「IV級」はより上質の小麦を加えて,食用に利用可とされる.「V級」「VI級」は,飼料および加工用とされている.
- <sup>11</sup> Алтухов, Указ. Статья, С.16-19.
- <sup>12</sup> Там же, С.12.
- <sup>13</sup> Жидков С.А. Российский экспорт зерна требует совершенствования//АПК: Экономика, управление. 2011.№4.С.53.
- <sup>14</sup> Там же, С.54, Кулик Г.В. Восстановить производство зерна—важнейшая задача//Экономика сельского хозяйства России. 2011.№3.С.42.
- <sup>15</sup> Российская экономика в 2010 году: тенденции и перспективы, Институт экономической политики им. Гайдара, М., 2011, С.287.なお,ロシア気象庁によれば,2010年と同規模の旱魃は5000年以上なかった可能性もあるという(Там же).
- <sup>16</sup> Скрынник Е. Б. Последствия аномальной засухи преодолеем//Экономика сельского хозяйства России// 2010 №12, С.11.